

◎自由発表（第1会場）

【演題等】「スクラムを組んだ生徒指導体制 ～農業教育の現場より～」

【講演・発表者】和歌山県立紀北農芸高等学校 教諭 吉田 大樹

・発表概要

中学校時代に不登校であった生徒や、生活習慣や学習習慣が定着していない生徒も多く在籍し、様々な背景をもった生徒一人一人に合わせた支援が必要になってきている。そこで、入学時の情報収集や教職員間のタイムリーな情報共有を大切にしていきながら、多くの大人が生徒に関わっていくことで成長につなげていきたいと考えている。



本校の特色である「農業」を生かした教育では、作物を育てることで得られる達成感、消費者に喜んでもらうことで得られる自己肯定感の醸成、自然の中で活動をおこなうことによる心の安定を期待することができる。また、仲間とともに農作物の生産・加工から流通・販売といった体験的な学びを進めていくことで、生徒自身が個性を発見し、社会的資質を向上させることで、将来をデザインするキャリア教育につながっている。教職員との関わりについても、教職員から農作業中に自然な声かけや励ましをすることで、双方向のコミュニケーションが生まれ、生徒の他者理解や自己理解につながっている。このような発達支持的生徒指導の取組が、中学校時に不登校であった生徒も登校できる環境を作り出しているのではないかと考えている。

・発表要旨

1 発表のキーワード「つなぎ愛シート」とは

和歌山県では、学校生活、社会生活が豊かに送れるように保護者と共に重点課題を話し合い、支援の目標を立て、合理的配慮についても本人・保護者と相談しながら指導方法を検討していくために、「つなぎ愛シート」を作成している。

小学校、中学校からではなく、乳幼児期から一貫した支援をするために、「つなぎ愛シート」を活用し、進級、進学時にこれまでどのような支援を行ってきたのかを引き継いでいく。

2 取組について

(1) スクラム1「情報収集と共有」

新入生に対して、年間3回の情報収集を行う。1回目は3月の合格発表時に各中学校の担当教員から、2回目は4月に入学してすぐの担任との二者面談で、3回目は5月に、授業や学校生活の様子を踏まえた上で出身中学校を訪問してどういう配慮をしていたかの確認を行う。そこで得られた情報は6月の現職教育で共有する。全教職員で情報を共有することで、生徒それぞれの性格や課題を認識して、授業内外で対応することができる。また、日頃の情報共有ツールとして、「気づきシート」というもので生徒の授業での様子を共有し、教育活動に活かしている。

(2) スクラム2「生徒との関わり方」

生徒との関わりの中で、教員が意識していることは、生徒と同じ目線に立って、教員から声をかけることである。朝は最寄り駅に2名、玄関前に4名の教員が毎日必ず立ち

、生徒一人一人に声をかけたり、グータッチしたりしている。担任、副担任以外に副々担任という役割もあり、SHRでは3人体制で、生徒の表情をチェックしたり、声をかけたりしている。何人もの先生が関わることによって、生徒が教職員への登校しやすい雰囲気が作られている。

(3) スクラム3「農業を生かした教育」

土作りから収穫、販売までを経験することで、生徒は成功体験を積み、達成感を味わうことができる。自分で収穫した野菜や果物を、家族や近所の方に配ったりすることによって、周囲の人との関わりも増え、コミュニケーションの生まれやすい雰囲気が作られる。また、教員は生徒たちが協力して頑張る姿を見て、仲間との関わりの中での生徒を理解し、褒め、背中を押すという雰囲気を形成している。

・質疑応答の概要

Q：中学校時代不登校だった生徒がなぜ登校できたのか。

A：生徒と教職員の距離感はすごく大事だと感じている。生徒が気軽に色々話すことのできる教員が多く、クラスや学校でいい雰囲気を作れていることが考えられる。また、本校の教育課程の特色上、屋外で身体を動かして行う作業が多く、心のゆとりが生まれることも理由として考えられる。